■ 特集「体験学習の実際とヴィジョン」

人間関係科の教育理念に根ざす価値の哲学的考察

人間関係原論の講義より"TO BE FREE"の美学を考える

中野　清（南山短期大学教授）

今日の私のニンカン用語として僕が選んだ言葉は、まだニンカン用語として全然定着していない、でもとても大事な言葉だと思って出しました。
それは、タイトルに付けてあります。「TO BE FREE」。「自由であること」。「自由を目指して」。そういう言葉なんです。日本語で何というかというと、翻訳がほとんど不可能だと思いまして、そのまま付けました。前のきんせいさん、グラバアさんもだいたいTグループの話が出てくるのですけども、ニンカンでは、どうしてもTグループのことが話題になります。Tグループはやはりすごくインパクトのある体験であり、学習場面であります。

僕が最初に行ったのは、１９８０年秋に学生のTグループ合宿があり、その前に教員として経験してないといけないということで、その年の夏に清泉寮で立教大学の講座で行ったTグループに出ました。それは、非常に鮮烈な体験でした。ただ、しんどいなと思いました。これをまたやるのかと思うと。Tグループをやるのは６、７年ぐらいは避けて通れるのなら、お休みしたかったけど、これは仕事だと思って、出ました。基本的には１年に、１回は出てました。それを過ぎてから、比較的Tグループとは楽な合宿だなと思いはじめました。そのまま何の準備もせずにぱっといけばいいだ、自分のままに座っていようと思いついたときからは、Tグループは楽しいなと思い始めました。そういう意味で楽な合宿だと思った。大変だなと思ったのは、スタッフとして、雑仕事がたくさんある。その仕事が大変。その仕事が軽くなるなら、もっともっといっても良いと思う。Tグループはとにかくそこに自分をおいてみればいい。ありのままの自分でいて、ありのままの相手にどうやって、向き合って、関わっていくのかが大事なことなんだろうなと思っています。

◎Ｔグループのふりかえり用紙にあった「自由－不自由」の項目

そのことと関連するのですけど、Ｔグループのふりかえり用紙、皆さん書きますよね。スケールで。以前は、もう少し違ったバージョンでやっていました。５段階評定でやっていました。その中に、「自由、不自由」という項目があった。一番最初にメンバーで参加した時、自分がチェックするわけです。メンバーですから、当然ですね。自由－不自由って何？何をチェックすればいいのか全然分からなかったのですよ。皆さんもそうなのかも知れないけど、よく分からないけど、付けるだけは付けていくわけです。そんな中で数セッション過ぎてから、トレーナーをやっていた人が、彼の最初のトレーナー体験だったようですが、「ぼくすごく不自由な感じがしてきたので、今しゃべらせてもらいます」というのです。不自由ってそういうふうに使う言葉なのかなと、その反対側の自由というのはそういうふうに使うのか、ちょっとだけ、モデルを聴いた感じがした。ちょっとずつ自分でやっていく。そして、１２、３セッション毎回スケールを付けていくことで、自分自身がすごい自由な感じ、不自由な感じであるというのを何となく感じる。でもすっきりと「よし分かったぞ」というところまでは行かなかったのですけど、何となく分かった。

レジュメにも書きましたように、その時感じたのは、何かにこだわっていて、あの人に話そうか話すまいか、この沈黙破ろうか破らないでいようかとか、自分の中にあるこだわりがあって、それが心が硬直して堅くなになっている状態。そのところから心を解き放っていく、その不自由から解き放っていく状態。それが自由ということかなと知った、というよう感じました。

もっと積極的に言うと、より自由をめざして、より自由がいいのだということになると、そういうこだわりを取り去って、こだわりなしにあるがままの自分として、まさに自由な気持ちで他の人に関わっていく。そういうことをここでやろうとしているのかなと、予感みたいなものを感じたわけです。

◎メリット先生のことばと生き方

最初のＴグループは一つの鮮烈な体験としてあるのですけど、その時に、初代の学科長リチャード・メリットという聖公会の司祭さんで、彼が、やっぱりずっとニンカンを主催して、彼の人となり、考え方というのはすごく大きかったなと思います。今でも、彼のスピリッツは我々スタッフの中にも生きていると思います。僕の中にも生きています。ニンカンの伝統として何が大事なのか、それは彼がもっていた生き方、それをどうやって受け継いでいくのか、ということだという気が今しています。印象的なことを一つ紹介しましょう。彼はアメリカ人で、よく握手をするのですけど、もちろんハッギングすることもありますけど。その時に、彼のは独特の握手で、さっと出すというより、パッと五本の指を一杯に拡げて、手を出すのです。いかにもよしやるぞという感じで、パッと開いてから、ガッと握って、すごく強く握るタイプですね。まさに、自

分の手をめいっぱい開くという人はめったにいません。本来握手というのは、西洋でもshake handsするのは、自分の手には何の武器も持っていません、あなたに危害は与えませんと、お互い確認しあって、それで契約をするというか、そういう合図なのですね。まさに、もうこれ以上何にも隠していない。どうぞこのままの私ですと相手に示して、それでそのまま、握手をするというか関わりに入っていく。他の人間がやると、わざとらしいのに、彼がやると実に自然なのです。その自然さというのは、これはパーソナリティの問題ですので、形でまねてもどうしようもないのですけど。Tグループの中でよく出てくる、「今ここ」その時の今を生きている自分自身を開いていくという、そういう自由さというか、おおようさというか。彼にそうされると、おもしろい事にこっちまで、開かれた感じがしてくる。これがすごいんですね。本人自身が空けっぴろげにパーッとやっているのではなくて、彼のかかわりの取り方が、相手に大きな影響を与えて、こちらまで自由にさせてくれる。メリットさんが好きだという人はたくさんいるけど、その辺に秘密があるのかなと思います。

◎日本語の「自由」と英語の「Free」

表題に「TO BE FREE」と英語で書きました。自由という日本語は昔からあったんですけど、意味合いが、江戸時代まで使われていたのは、あまりいい意味ではない。気ままとか、わがままとか勝手という、マイナスの符号が付いていた。わがままなことはしてはいけないというのは昔から言われていた。ですから、それは子供じみたことであったり、世間の常識を外れた無頼漢であったり、そういうものに対して使われる用語法が一般であったのです。でも明治に入って、「フリー」という言葉あるいは「リバティー」という英語を翻訳して日本に何かを伝えようとする動きの中で、いろんな翻訳語が創られたのですけど、その中で一つの翻訳語として、「自由」という言葉が使われた。ところが、この「自由」という言葉を翻訳語として選んだ人たちは、欧米ではすごくいい意味ですよと、いつも注釈を必ず付けたくらい、日本語の元々の「自由」という言葉は、自由であったら素敵なんだというイメージがなかった。今私たちは明治時代から１５０年たって、ようやく少し、欧米の人たちが使っていたフリーということに、プラスのイメージを持って使う、感覚も少し言葉にも出てきたのだろうと思う。それと類する言葉に「愛」があります。愛するという言葉も江戸時代まではいい言葉ではなかった。欧米系の「ラブ」という言葉も、今は、愛するとは素敵な言葉だとみんな思うのでしょうけど、かつてはそうではない。自由という言葉も同じ。

やっぱり今でも自由という言葉のマイナス面は、全然ないわけではない。自由勝手とくっつけて使われるように、そういうイメージがありますが、自由のプラスの側面に注目してみたいと思っています。

ニンカンが目指しているあり方として、自由もすごく大事だろうなと思う。

日本語がもっているマイナスのイメージがくっつくと、自由も素敵だけど、程々のところにとどめておいたらば、大人としてまっとうな社会人になれるよ。つまりは、自由は端的に求められる価値ではないということかも知れません。

しかしニンカンの中では、高い価値付けがある言葉ではないかと思います。もう一度、もとの言葉である英語のfreeとはどんな感じなのかなと考えると、いろいろな用例や用法を見ていくと、やっぱりとらわれていたもの、鎖につながれていたもの、そうしたところから、解き放たれていく、開放されていくこと。もう一つ非常に大きいことは、フリーであることによって、自分が何かを決定する、そういう力、権利を持つということ。自己決定。責任と言うことが、日本語の自由という言葉には、気ままわがままというところに非常に力点があるのですけど、自分の行為、行うこと、それを自分が決めて、そのことの責任を、プラスの意味でも、マイナスの意味でも、その場、その結果があったところで、その責任を自分のところに引き受けていくこと、責任をもつその権利をもつことが大事になってくる。この面では法律的な意味合いの用例が多くなってきている。この側面は、日常の日本語の中にはなかなか生まれてこない。

もう少し、文学的、宗教的意味合いでの生活の中に深く根ざした感じからすると、寛容さ、寛厚さ、何かフリーであるということは、人に許しを与える、あるいは時には自分自身をゆるすということもあるでしょう。あるゆとり、ひろがり、寛容であるということ、それはすごく大事なことで、その中に気持ち的なことでは、喜び（生の躍動）と書きました。生きているよろこび、生きている動き、身体そのものが何か生き生きと動いているそういう喜びを感じる。これは、ｆｒｅｅという英語は、元々はゲルマン系の言葉です。リバティという英語もありますが、これはラテン語からきた言葉です。フリーというゲルマン系の人がもっていたものを、ドイツ語では、ｆｒｅｅのさいごのｅをｉに変えて、フライ、フッという音。ドイツ語では、フリーデ平和。フロイデ、喜び。第九交響曲の冒頭でのフロイデ、まさに生きている喜びそのもの。頭のところに出てくるｆｒの音は、平和や喜び、そうした人と人としてこの世に生きて生まれて、自然と共に、かかわりあって、そうした生きている喜び、つながっていること、かかわりあっていること。そういうことを根元的な感情として表現したものではないでしょうか。レジュメに書きましたが、もともとは、フリーという英語は、フレオという旧い英語からきている言葉。意味は、ディアとかフェイバーと言う言葉につながります。場合によっては、ラブという言葉にもつながってゆきます。愛するということは豊かな愛の感情をもつこと。そういう意味が本来の英語の語源で、語源辞典にも出ています。

僕は、こういう言葉を、「Free」とは、Dear(my friend)／Joy to love, Joy to live／With you と置き換えたい。これはやはり、彼らにとって、端的に求められる価値です。このことをめざして、さまざまな働きをし、さまざまな行為をし、さまざまな人と関わり、生きていこうとする、すごく大事な価

値なんだと思います。日本語の自由にももう少し端的な価値として、もっともっと豊かな意味づけを付加してもいいのではないかと思っています。

◎自由へのあこがれ：自立・自分・自由

これはやっぱり、僕自身の生涯の課題というか、そこに価値を見出して、なんとか、そのことをめざしたいなと思っている。この中で、僕が大事にしてきたもの。細かい話は今回できませんが、自由と結びついて、やっぱり自律ということ。自由の大事な側面として、大事にしたいなと思う。自分自身であることも大事にしたいなと。すべてひっくるめて、自由であることを大事にしたいなと思う。

◎自分の自由の権利、他者の自由の権利を保障するものは何か／誰か？

自分が自由であることは、まさに一個の人間の権利として、近代のヨーロッパの市民社会がそういうふうに打ち出したものです。近代のヨーロッパが生み出したすごい言葉が、「個人」という言葉だったのです。まさに個人主義。一人ひとりが自由であること、自己決定権を持つこと。今でも大事にされていると思います。日本にも伝えられてきたものであると思います。それは、自分が一個の人間であるということです。自分がどのようにどこで保障されるのかという大問題があるのですけど。もう一つは、私がかかわるという。相手が自由であることの権利って、いったい、私の自由な権利と矛盾しない形で、保障していくことができるのだろうかというとき、一つの方向として考えられることは、民主主義です。戦後五〇年模索し続けている、まだまだこれからも模索し続けていくのだろうと思いますけれども、そうした大きな課題が一つあります。

もう一つの自由と関連して出てくるニンカンでの大事な課題は、人を援助するということ。援助するということはどんなことかをもう少し明確に言語化する必要があるように思います。今日の話の関連でいきますと、相手の自由を保障していくことが非常に大事な側面じゃないかと思います。あなたを助ける。あなたの何かをしてあげるということが、どうしても日本語にはあるのですけれども、これはドイツ語では、すごくおもしろい。「Ich hilfe dir」というのですけれども。あなたを助けるは使わない。あなたに対して(dir)、私は、ある行為を行いたいということ。あなたを直接、助けるではなく、こうしたらあなたは便利でしょうというので、いきなりやるのではなく、私に何をして欲しいのかを相手に確認する。そこからしか援助することは始まらない。日常生活の卑近な例からしても、食事をとるところから、家族によって違うかも知れないけど、僕が居候していたドイツ人の家庭では、高校生の子どもの食事の好みを知っているのだけど、毎回母親が訊くのですね。あなたの身体の今日の調子はどうか？これはあなたの好みだけど、今日はどれくらい食べるのかとか、いちいち訊くのです。その母親が特別かも知れないけど、まさにそうして相手が

今どんな状態なのか？相手が何をして欲しいのか？相手がどうなったらいいなと考えているのか？私が勝手に推測するのではなくて、まず聴いてみる。そこから、何か相手との関わりが始まっていく。やっぱりすごい感覚だなと思います。言葉一つの使い方でも現われてくるような感じがしているのです。

援助するという言葉の先に、自由という言葉がめざしていること、Joy to love、Joy to live、愛するという言葉が一つの大きな価値をもって、私たち日本語を使って暮らしているその中に、本当の素晴らしい価値が見えてくるようになると素敵だなと思っています。

◎人関の理想は、アメリカ型

やっぱり自立すること、フリーということにも関連して、independenceというのは、ヨーロッパ系アメリカ人が、ヨーロッパから移民としてやってきた時に、一番大事なものとして、もっとも価値の高いものにしている。独立記念日の独立(independence)です。一人の個人が、大人になっていく。自分の足で立って、歩いていく。そのために教育していくことは、、自分自身どれくらい自信をもてるのか、自分自身をrespectするというか、self-esteemというのですが、自分自身を尊敬できるような教育を非常に大事にしていく。自分が自分の力で立っていくという中に、フリーという言葉も一つつながっていて、それは、メリット先生の感じというのは、やっぱりヨーロッパ人の感じとはすごい違うのです。僕にとっては、彼は上質なアメリカ人の一つの伝統、生き方として生きている人という感じがして、人関がやっぱり、あるがままである、そういうかかわりの場面を大事にしようと、そして、相手に対してもそういう場面を保障しようとするのはどのようにできるのかを、それを大事な学習課題にしようとしている。そうやって、フリーであること、またお互いにフリーであることによって、きっといい関係が生まれるのだということ。自由にしあっているとおそらく悪くなるのではないかということよりは、むしろ希望の方に、期待の方に、そうやってお互いが独立していくこと、何か人から離れていくのではなくて、そうやることで次が、私が私であなたはあなたということを、保障することで、次の関係がもっと面白くなるよという。別れ別れになっちゃって、寂しくなっちゃう、一人ずつは違うのだと言い放って、関係を切っちゃうのではなくて、そこから本物の関係、人との関係が始まるのだということ。これがやっぱり、アメリカ人が、自由にすれば人は必ず良くなるんだという、これはアメリカを独立させていった、アメリカの建国の理念だったと思うのですけど、自由に対する理想、価値づけであったわけです。それは人関も同じで、自由であることは大事にしているのではないかと思うのです。その限りにおいては、日本ではまだ、１５０年の歴史しかもっていないけれども、でも別にアメリカ型だろうか、なにでもかまわないけど、良いものは良いということで我々はやっていけばいいのではないかなという思いがぼくにはあります。